

**標**本調査の場合は標本誤差が付きものである。しかし、調査における誤差は、標本誤差だけではなく様々な非標本誤差が生じ得る。

非標本誤差とは、本著において「人間によるミスという要因と調査実施の状況的要因の両方を含め、実際の社会調査が原則通りに進まないことで生じる、正確な情報からのズレ」と定義される。

数多くの社会調査を実際に手掛けてきた著者の経験に基づき、「非標本誤差をコントロールする技能が多少とも現場の人間の間で知覚されているものの、それが学問として自覚されていない」ことから、この「無自覚なノウハウをどのように意識表面にのせ体系化」することによって「非標本誤差を科学的研究の対象となし得るか」が本書の課題となる。

計算することができる標本誤差とは違い、誤差が生じる状況の多様さとその誤差の大小が数量的に把握できない非標本誤差は厄介な存在である。この本は、厄介な非標本誤差を小さくすることによって、正確な情報を得るための質の高い調査を行おうという提案でもある。

もとより調査者は、調査企画の段階で調査目的に合った調査方法であるか、その調査方法に適した調査対象の抽出方法であるか、調査対象に応じた調査日程であるかといったことなどを十分に検討しなければならない。また、正確な情報を得るためにはバイアスのない、すべての回答者に共通に意味が通じるような質問を作らなければならない。それでも非標本誤差は生じる。

本書が目指してきたのは「非標本誤差の俯瞰図を描くこと」である。様々な社会的制約が社会調査の結果に影響を及ぼすなかで、これらの影響を最小限にとどめるために行うこととして著者は以下の二点を挙げている。第一に、「調査の実施過程を詳細に把握し、個別の状況的制約がどのような影響を及ぼすかを事前に



## 社会調査における 非標本誤差

吉村治正 編

東信堂  
2017年  
A5判, 248ページ  
3,456円

予測し、これに柔軟に対応し、原則として想定されている状態にできるだけ近接するように社会調査を管理すること」であり、第二に、「社会調査に人間が関わることで不可避に生じるミスや間違いといった問題を、社会科学の知識を持って可視化し、可能な限り予防していくこと」である。

本書の構成は、社会調査の誤差として考えられる「標本誤差」以外の「網羅誤差」、「非回答誤差」、「測定誤差」、「集計誤差」の4つの非標本誤差から成っている。

まず、抽出台帳の適合度に関する「網羅誤差」では、調査対象と抽出台帳とのズレに関して、抽出台帳のアップデートの処理について実際のデータをもとに説明がされており、どのように、どの程度の乖離が生じているのかが理解できる。

次に、調査における調査不能の問題に関して、「非回答誤差」を(1)回答率の低下、(2)回答率と偏りの関係、(3)非回答の理論という視点で具体的なデータをもとに調査の実状を示し、また、非回答を生み出す要因を探るべく非回答に関

する代表的な理論を紹介している。

また、調査を実施するうえで生じる「測定誤差」に関して、(1)質問文に起因するもの、(2)調査員に起因するもの、(3)回答者に起因するものに分けこれまでの知見が広く紹介されている。

最後に、「集計誤差」については、ヒューマンエラーが発生する例として実際の集計作業でのコーディングにおける事例が紹介されており、さらに集計誤差を抑制する方向性が検討されている。

ネット社会において「あてにならない情報」が増えていることに同調し、「あてにならない社会調査」が増えるようでは困る。本書は正確な情報を得るための質の高い調査、すなわち「あてになる調査」を行うための指針を授けてくれる。